



OBON SOCIETY 活動概要資料

May 2017

はじめに

戦死された日本兵の一人一人にも、家族がいました

何十年という月日が過ぎた今も、失った大切な人を思う家族がいます。遺骨も、遺品も、戻らなかった多くの家族にとって「寄せ書き日の丸」の返還は戦死兵の魂が、家族へ会いに帰ってきたことを意味するのです。

活動のきっかけは、個人的なある「経験」が発端でした。

ビルマ（現ミャンマー）で戦死し、未帰還兵であった敬子の祖父の「寄せ書き日の丸」が、2007年に家族の元へ遠くカナダから返還されたのです。その奇跡の体験から、他にも多くの日の丸が世界のどこかに保管されているのではないかと考えた私たちは、以後念入りな調査を続けました。そして現在でも、先の大戦で戦利品として持ち去られた「寄せ書き日の丸」が無数に現存している事実を知るに至ったのです。

戦争で失われた尊い命。そして多くの場合、海外で戦死した兵士たちの遺骨や持ち物は、家族に届くことはありませんでした。そんな中、旗は戦争で亡くなった兵士たちと家族をつなぐ、唯一の魂の証でもあるのです。

「少しでも現存している多くの日章旗を返還しよう」という思いをもとに、私たちは米国・オレゴンを拠点に活動を続けています。かつて敵国同士だった日本とアメリカ。戦後70余年という時が流れ、両国の関係は素晴らしいものになりました。国際結婚をした私たちにとっては、日本もアメリカも大切な「祖国」です。

アメリカには亡くなった日本兵の事を心から想い、日章旗を返還することによって、過去の歴史と心のわだかまりに終止符をうち、これから先の未来を平和に、そして友好を築いていこうと願われている退役兵、そしてその家族がたくさんいます。

現場で周知している私達が、そのような全米からの多くの温かな声を、日本へお届けする橋渡し役が、OBON SOCIETY の使命であると思っています。

人の心に「国境」はありません。家族を思う気持ち、誰かの愛する人に敬意を捧げる思いは、国が違ってても共有できるものと思います。日章旗返還は、旗を返還するという目に見える行為の裏側にあるもの、それは目には見えない「平和」「友好」「和解」の真摯で温かな思いなのです。

全米を含め、世界中には、まだまだ還れないでいる日章旗が無数にあります。

一枚一枚の日章旗返還を通して、「平和」と「友好」の輪が世界へ広がって欲しいと願っています。

OBON SOCIETY 代表

レックス&敬子 ジーク

組織概要

活動団体名

OBON SOCIETY (非営利団体/オレゴン州公認非営利組織)

活動の目的

非営利、非政治、非宗教の立場のもと、国家間の絆を繋ぎ、両国民が平和と友好を共に分かち合える未来を作る人道的活動を目的とする。先の大戦時に、連合軍兵士たちが持ち帰った「寄せ書き日の丸」を、日本の遺族の元へ返還するという活動を基軸とし、両国のさらなる友好関係を、民間レベルで構築することをミッションとする。

OBON SOCIETY の活動概要

日章旗を返還したいと願われている人と、受け取られるご遺族の、橋渡し業務を活動とする。日章旗返還を希望される所有者から旗を受け取り、敬意をもって大切に保管・管理・搜索をし、無償で日本のご遺族へ返還している。調査開始は2009年5月。様々な研究、検証等を行いながら活動のネットワークを徐々に広げ、厚生労働省や日本遺族会、OBON 搜索チーム他、多くの方々の協力を得て現在に至る。2017年5月現在までに、退役軍人と その家族から託された「寄せ書き日の丸」は400枚以上。ご遺族や地元コミュニティーへ100枚以上の旗返還を行った。

組織所在地

米国オレゴン州、アストリア (Astoria, Oregon U.S.A.)

組織の沿革

- 2009年 5月：OBON 2015 と命名し活動を開始
- 2015年 8月：首相官邸において 安倍総理表敬訪問
- 2015年 12月：外務大臣表彰 受賞
- 2016年 1月：OBON SOCIETY に活動名を変更
- 2016年 12月：「旧日本兵の遺品取引禁止」をeBayに要望し、自主規制という形で達成
- 2017年 3月：OBON SOCIETY オーストラリア 発足
- 2017年 4月：一般社団法人 OBON SOCIETY 発足

お問合せ

Eメールアドレス： contact@obonsociety.org

ウェブサイト： <http://obon2015.com>

フェイスブック： <https://www.facebook.com/OBONSOCIETY/>

活動支援に関するページ： <http://obon2015.com/obon-2015--3.html>

~~~ OBON SOCIETYは、旗の提供者にもご遺族へも無償で返還活動をしております ~~~

## 代表者プロフィール

### レックス・ジーク

米国オレゴン州とワシントン州で生まれ育った木こりの息子で、高校卒業後は中南米で先住民の生活記録を学び記録する。その後、写真家（1992年5月Life紙掲載）、記録映画カメラマン（1993年エミー賞受賞）となる。ワシントン州の森で樹齢900年の森林が大企業によって伐採される寸前に、レックスが工夫して考慮した熱意の訴えにより、伐採から免れ森が保護地区となり現在も無事に生息している。

レックスの独自研究により、ルイス&クラーク探検隊の歴史記録の矛盾を発見、ワシントン州ゲリー・ロック知事指名によって、知事の諮問委員会となる。レックスの新たな発見がキッカケとなり米国内務省が記念して、新たな国立公園を制定する。

2009年より、レックスと敬子でOBON SOCIETYの活動を開始する。

### 敬子・ジーク

京都で生まれ育つ。小学5年生から剣道を始め8年間修業（剣道二段）。高校卒業後は日本と英国で美容師免許取得。豪華客船で勤務後、持ち前の社交的な性格から、豪華客船で士官に就任し、世界各国をクルーズする日本人や世界中からのお客様の接待を務める。

2007年に祖父の「寄せ書き日の丸」が返還され、2009年に結婚したレックスと共に、OBON SOCIETYの活動に取り組み、現在まで至る。



OBON SOCIETY に託された寄せ書き日の丸とレックス&敬子 ジーク



写真上（2点）：オレゴン州アストリア日章旗返還式典より



首相官邸において安倍総理表敬訪問

## 欧米と日本における「旗」の概念の違い

日本人にとって「寄せ書き日の丸」とは、先の大戦で出征する兵士へ武運長久を祈り、愛する一人一人が心を込めて直筆で署名やメッセージを日章旗に寄せ書きしたもの。それを受け取った日本兵達は、丁寧に折りたたんで肌身につけ戦地へと赴いた。当時、殆ど全員の日本兵が1～3枚の「寄せ書き日の丸」を身に付けていたとされている。つまり、日本人にとっての「寄せ書き日の丸」は、日本人の精神性を象徴するものであった。

一方において、欧米諸国においての「旗」は、全く違った意味をもつ。西洋の歴史において、戦地における「旗」は、敵味方の軍を識別するための重要なツールであり、交戦を先導するための役割をもっていた。そのため、敵軍の「旗」を戦利品として納めることは、大変名誉な事とされ、実際に敵軍の旗を持ち帰った兵士は大きな手柄をたてたと賞賛され、名誉勲章が手渡されることも多かった。

そのような旗に対する文化認識の違いから、欧米兵にとって「寄せ書き日の丸」は、戦利品の中では、一番人気があった。日本兵の全員が身に付けていたので、多くの連合軍兵士達が入手できたことも、多くの旗が今も現存している理由の一つだ。日本語が読めない連合軍兵士たちにとっては、そこに何が書かれているのか理解する術は、なかったのだ。

OBON SOCIETY はアメリカを中心として欧米諸国に、寄せ書き日の丸の意味を正しく伝えることで、旗返還を通じた平和啓蒙を続けている。



出征する日本兵 (OBON SOCIETY 所蔵資料)